

EPSON
EXCEED YOUR VISION

2010年度(2011年3月期) 第4四半期 決算説明会

2011年 4月28日

セイコーエプソン株式会社

©SEIKO EPSON CORPORATION 2010. All rights reserved.

■ 将来見通しに係わる記述についての注意事項

本資料に記載されている将来の業績に関する見通しは、現時点で入手可能な情報に基づく将来の予測であり、潜在的なリスクや不確定要素を含んだものです。そのため、実際の業績はさまざまな要素により、記載された見通しと大きくかけ離れた結果となりうることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素としては、日本および諸外国の経済情勢、市場における新製品・新サービスの開発・提供と需要動向、価格競争、他社との競合、テクノロジーの変化、為替の変動などが含まれます。今回の東日本大震災による影響については、現時点で入手可能な情報に基づき反映しておりますが、予測不可能な要因により変動する可能性があります。なお、業績等に影響を与える要素は、これらに限定されるものではありません。

■ 本説明資料における表示方法

数値： 表示単位未満を切り捨て

比率： 千円単位で計算後、表示単位の一桁下位を四捨五入

開示セグメントの変更について

【2010年度から】

- 「マネジメントアプローチ」の考え方に基づき、
2009年度まで各セグメントならびに各事業に売上高比率で配賦をしていた本社費用を
2010年度からは「**全社セグメント**」に集約
- 「その他の事業」セグメントで計上していた、グループ向けサービスを目的とした
子会社は機能を各事業に移管
- 2010年度実績の説明において、
前年度を比較対象とする場合は、2009年度のセグメント損益もあわせて補正

【2011年度から】

- ものづくり基盤の再構築・強化を迅速に実行することを狙いとして、
「**電子デバイス事業セグメント**」と「**精密機器事業セグメント**」を統合し、
「**デバイス精密機器事業セグメント**」とする
- 「中・小型液晶ディスプレイ」のオペレーション終結を受け、2011年度以降発生する
損益については「**その他**」に集約
- 2011年度予想の説明において、
前年度を比較対象とする場合は、2010年度のセグメント損益もあわせて補正

2

■ 開示セグメントの変更内容

1. 概要

2. 詳細

決算ハイライト（通期）



| (億円) | 2009年度 | | 2010年度 | | | | 増減額 / 増減率 | |
|-----------------------|-------------|-------------|-------------|------|-------------|------|-----------------|---------------|
| | 実績 | % | 1/28予想 | | 実績 | | 前期実績比 | 1/28予想比 |
| | | | | % | | % | | |
| 売上高 | 9,853 | - | 9,800 | - | 9,736 | - | -116 -1.2% | -63 -0.6% |
| 営業利益 | 182 | 1.8% | 350 | 3.6% | 327 | 3.4% | +144 +79.5% | -22 -6.5% |
| 経常利益 | 138 | 1.4% | 340 | 3.5% | 311 | 3.2% | +172 +124.7% | -28 -8.3% |
| 税引前利益 | △7 | -0.1% | 220 | 2.2% | 153 | 1.6% | +161 - | -66 -30.1% |
| 当期純利益 | △197 | -2.0% | 100 | 1.0% | 102 | 1.1% | +300 - | +2 +2.4% |
| EPS | △99.34 円 | | 50.05 円 | | 51.25 円 | | | |
| 換 算 レ ー ト | USD | 92.85 円 | 85.00 円 | | 85.72 円 | | | |
| | EUR | 131.15 円 | 112.00 円 | | 113.12 円 | | | |

4

■2010年度通期決算ハイライト

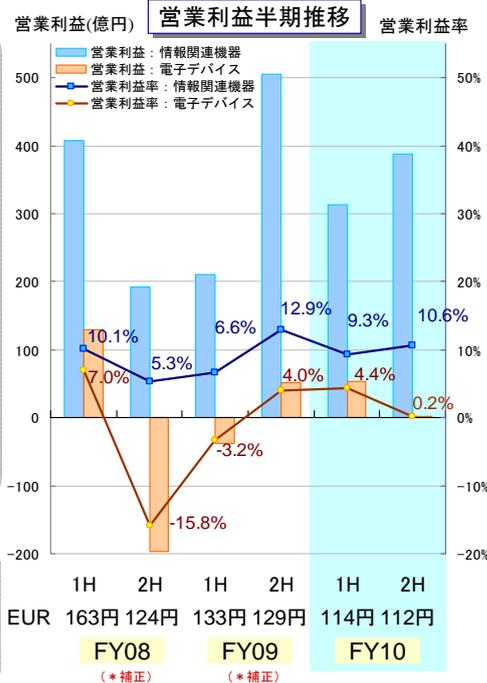
- 2010年度は、ユーロ USDともに 円高で推移したことにより売上高で 約600億円、営業利益で約240億円のマイナス影響。
- そうした中、売上高は 前期比 116億円減収の 9,736億円、営業利益は 144億円増益の 327億円、当期純利益は 300億円増益の 102億円となり、前期から、大幅に損益を回復。
- 1月28日に発表した前回予想に対しては、売上高および営業利益は、若干未達とはなったが、当期純利益を含め、ほぼ想定どおり。

2010年度 決算のポイント



- 上期はビジネス向け需要の回復、好調なデバイス需要、原価改善の効果などにより、円高による為替影響をカバーして損益を改善
- 下期は引き続き円高で推移する中、一部で震災の影響を受けたものの、情報関連機器は新商品のタイムリーな市場投入、継続的な事業体質強化の努力により、利益創出。
- 中・小型液晶ディスプレイ事業の構造改革を完遂
- 来期以降の新たな成長軌道確立に向けた仕込みを着実に実施

当期純利益ブレークイーブン以上を
達成



5

■2010年度 決算のポイント

- 2010年度上期は、景気回復の流れを受け、ビジネス向け製品の需要回復や、半導体および水晶デバイスを中心とした電子デバイスの好調な需要を確実に取り込んだことや、継続的に取り組んできた原価改善の効果などで、急激な円高進行による為替影響を受けながらも、損益を改善。
- 下期は、インクジェットプリンター市場の回復が、想定より遅れたことなどから、計画していた数量にはとどかなかったものの、プロジェクターやSIDMなどのビジネス向け製品は引き続き堅調に推移。
- 為替のマイナス影響に加え、東日本大震災により、一部生産拠点の操業停止や、需要変動などの影響があったが、従来から強力に推し進めてきた事業体質強化への取り組みの成果などにより、利益を創出。
- 構造改革を進めていた中・小型液晶ディスプレイ事業は、2010年度末でオペレーションを終結するとともに、中国での組み立て受託ビジネスについても、2011年度上期中にソニー様へ譲渡することを決定し、これをもって一連の構造改革を終了。
- 以上の結果、2010年度の経営目標である「当期純利益ブレークイーブン以上」を達成。

情報関連機器セグメント

- IJP : ビジネス向けラインナップの大幅拡充、エマージング市場向け製品の投入。商業・産業分野向け製品の販売開始。インドネシア、フィリピンの生産能力増強への取り組み。
- BS : 中国における徴税需要をSIDMで継続的に獲得。先進国・エマージング市場のPOS関連製品の確実な取り込み。
- プロジェクター : ビジネス・教育市場、ホーム市場向けラインナップの拡充。インタラクティブ機能など付加価値分野の拡大。フィリピンの生産体制の確立。

電子デバイスセグメント

- 水晶・半導体 : マイクロデバイス事業強化に向けたマネジメント体制の整備。水晶デバイスの生産能力拡大。半導体はEPDコントローラーなど強みを活かせる分野の開拓。
- HTPS : 社内外の完成品需要の取り込み、新規需要の開拓。

■ 2010年度、主な事業別の成果

➤ 情報関連機器

インクジェットプリンターは、プラットフォームの共通化をベースに、ビジネスおよびエマージングに向けたラインナップを大幅に拡充したことで市場成長を超える数量成長を果たした。ラベルプリンターやミニラボシステムなど、商業・産業分野向け製品の販売も、順次開始。

- ビジネスシステムは、中国の徴税向けSIDMや、POS関連製品が、引き続き堅調に推移。
- プロジェクターは、ビジネス、教育、ホームの各市場に向けたラインナップを拡充したことにより、市場成長を大幅に上回る販売数量。
- インクジェットプリンターとプロジェクターについては、インドネシアとフィリピンで、将来の数量成長を支えるための、生産能力の増強に着手。
- 電子デバイスでは、水晶デバイスの生産能力拡大や、半導体の強みを活かせる分野の開拓を進めた。同時に、損益構造の改善を着実に進めるため、マイクロデバイス事業のマネジメント体制を整えた。

2011年度 業績予想



| (億円) | 2010年度 | | 2011年度 | | 増減 | |
|-----------|--------|---------|---------|------|------|--------|
| | 通期実績 | % | 通期予想 | % | 増減額 | 増減率 |
| 売上高 | 9,736 | - | 9,700 | - | -36 | -0.4% |
| 営業利益 | 327 | 3.4% | 430 | 4.4% | +102 | +31.5% |
| 経常利益 | 311 | 3.2% | 400 | 4.1% | +88 | +28.3% |
| 税引前利益 | 153 | 1.6% | 300 | 3.1% | +146 | +95.0% |
| 当期純利益 | 102 | 1.1% | 170 | 1.8% | +67 | +66.0% |
| EPS | 51.25円 | | 85.09円 | | | |
| 換算 レート | USD | 85.72円 | 80.00円 | | | |
| | EUR | 113.12円 | 115.00円 | | | |

2011年度の業績予想については、震災に起因する以下の業績変動要因のうち業績予想公表日時点で把握可能な影響を加味している。

- ① 震災により直接被害を受けた生産設備における生産ロスの影響
- ② 原材料・部品等の調達リスクおよびそれに伴う生産変動リスク
- ③ 消費電力量削減に伴う生産設備稼働ロスによるリスク
- ④ 震災の影響に伴う景気変動や最終顧客の需要変動

以上の要因のほか、今回の震災に伴う現時点では予測不可能な要因により業績が変動する可能性がある。

なお、これらの変動要因のうち業績悪化のリスクに対してはその影響を最小限に止めるための対応施策を反映し業績予想を策定している。

7

■2011年度の業績予想

- 売上高は、ほぼ前期並みの 9,700億円、
営業利益は 102億円増益の430億円、
純利益は 67億円増益の 170億円 を予想。
- 2011年度の業績予想には、今回の震災に起因する業績変動要因のうち、
現時点で把握可能な要因と、その影響のみを反映。
想定される業績悪化のリスクに対しては、その影響を最小限に止めるための対応
施策を反映し、業績予想を策定。
- しかし、現時点では予測することが不可能な要因もあり、
結果的に予想が変動する可能性がある。

2011年度の位置づけ

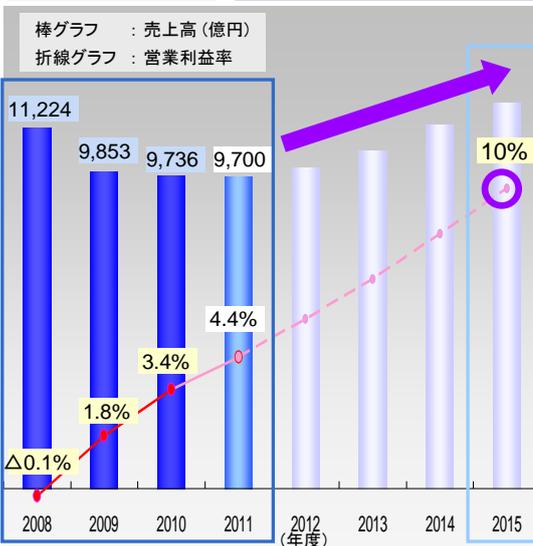


長期ビジョン「SE15」前期中期経営計画(2009～2011年度)

SE15 業績目標
(2015年度)

ROS 10%、ROE 10%以上
(売上高成長を前提として)

SE15 前期中期経営計画
(2009～2011年度)



2009年度
 ✓ 経常利益ブレークイーブン
 ✓ 長期ビジョンの布石となる
 事業基盤を再構築

2010年度
 ✓ 当期利益ブレークイーブン以上
 ✓ 確実に利益が確保できる
 企業体質の定着

2011年度
 ✓ 長期ビジョン「SE15」実現に
 向けた新たな成長軌道を確立

■ 2011年度の位置づけ

- エプソンの長期ビジョン「SE15」では、2015年度における業績目標として、売上高成長を前提に、ROS：売上高営業利益率 10%以上、ROEを継続的に10%以上を、定量目標としている。
- SE15 の達成に向けた前半の3カ年計画として、「SE15 前期中期経営計画」を策定し展開。初年度である2009年度は、目標として掲げた「経常利益のブレークイーブン以上」を、2年次の2010年度は、「当期純利益のブレークイーブン以上」をそれぞれ達成。将来の再成長を確実なものにするための戦略も、この2年間で着実に推進・実現。
- 中期経営計画で取り組んで実現してきた経営の大きな方向性には、自信を深めている。
- 2011年度はこの中期計画 の最終年度として、「新たな成長軌道を確立する年」と位置づけ。エプソンの成長を社内・外に明確に示す具体的な数値目標として、営業利益率 5% という水準を定め、2011年度計画の策定を進めてきた。

被害を受けた主な生産拠点の状況

1. エプソンアトミックス(金属粉末、金属射出成形部品、人工水晶)
 - ✓ 射出成形部品、人工水晶は生産再開
 - ✓ 金属粉末は4月28日から生産再開
2. 秋田エプソン(プリンター部品、水晶デバイス、超精密部品)
 - ✓ 全ての製品の生産再開
3. 酒田事業所/東北エプソン(半導体、インクジェットプリンター部品)
 - ✓ インクジェットプリンター部品、半導体の一部工程は生産再開
 - ✓ 今後も電力供給状況、材料調達状況を確認しながら生産継続
4. エプソントヨコム福島事業所(水晶デバイス)
 - ✓ 事業所を閉鎖中

その他の事業への影響

- ◆ 部品調達の状況により、一部商品の生産に影響が出る可能性
- ◆ 代替部品の調達や技術的な施策対応などにより、影響を最小限に

9

■東日本震災における状況

- 今回発生した震災はエプソンの経営にも大きな影響。
- 大変残念なことにエプソントヨコム 福島事業所の従業員1名が亡くなった。
- 東北エリアでは4カ所の生産拠点が被災し電子デバイスを中心に、生産への直接的な影響が発生。酒田事業所で生産している半導体については、4月に入って一部の生産を再開したが、今後の電力供給状況や材料の調達状況など、いまだに不透明な要素があり、業績に影響が出るものと想定。
- エプソントヨコムの福島事業所は、福島第1原子力発電所の状況を勘案し、当面の間、閉鎖状態が継続する前提で対応。
- 原材料・部品等の調達難に伴ない、当社の完成品事業の生産への影響も、発生。インクジェットプリンターでは、2010年度に引き続き2011年度も市場成長を上回る数量成長を前提としていたが、一部の部品調達に支障があり生産への制約が生ずる見込みのため、現時点では前年比で微増程度の販売数量を想定。
- 情報関連機器のその他の事業においても、少なからず影響が出る可能性が見込まれているため、その挽回に向けた施策を展開。

「SE15」の実現に向けた経営戦略に揺るぎはない

- SE15で示す成長の端緒につき、新たな成長に向けた流れをつかむ
- 震災の影響を見極め、あらゆる努力により挽回する

インクジェットプリンター：お客様セグメントに最適な商品を提供するためのラインナップの拡充

プロジェクター：No.1ポジションならではの、豊富なラインナップの提供

マイクロデバイス：省・小・精のDNAをベースに強いデバイスを提供

SE15 後期中期経営計画(2012年度～2014年度)に向けて
お客様価値の創造を「究めて極める」

■2011年度の取り組み

- 2011年度を開始するにあたり、当初目指していた営業利益率 5%水準の計画は、見送り。しかしエプソンの経営が目指す方向、SE15の実現に向けた経営戦略には揺るぎはない。
- 今期の営業利益率予想は4.4%、震災による影響や円高水準の継続などの厳しい経営環境が続くなか増益は確実に実現したい。
- 主力の事業において従来から取り組んでいる戦略を今まで以上に加速・強化。
- インクジェットプリンター事業では、ビジネス、エマージング、コンシューマーなど、それぞれのお客様ごとに最適な商品を提供していく方針に基づき、商品のラインナップ拡充に取り組む。
- プロジェクター事業では、社内にコア技術を有する強みを活かし、No.1 ポジションならではの豊富な商品ラインナップの提供により今期も市場成長以上の数量を販売しシェア拡大。
- マイクロデバイス事業を構成する水晶と半導体は、エプソンを支える「省・小・精」の最もベーシックな意味でのDNA。強みを総合して小さく、低コストで、性能の良いデバイス・モジュールをつくり、従来のものを置き換え、シェアを上げ、利益を上げ、プレゼンスを上げる。そこまでを一気呵成にやり遂げるべく、商品戦略の先鋭化、事業運営の効率化、変動費のコストダウン等の課題に取り組む。
- 2011年度はこれらの戦略を着実に実行、2012年度から始まる次の中期計画に向けてしっかりとした仕込みをする。

1. 概要

2. 詳細

1) 2010年度 決算

2) 2011年度 業績予想

決算ハイライト（通期）



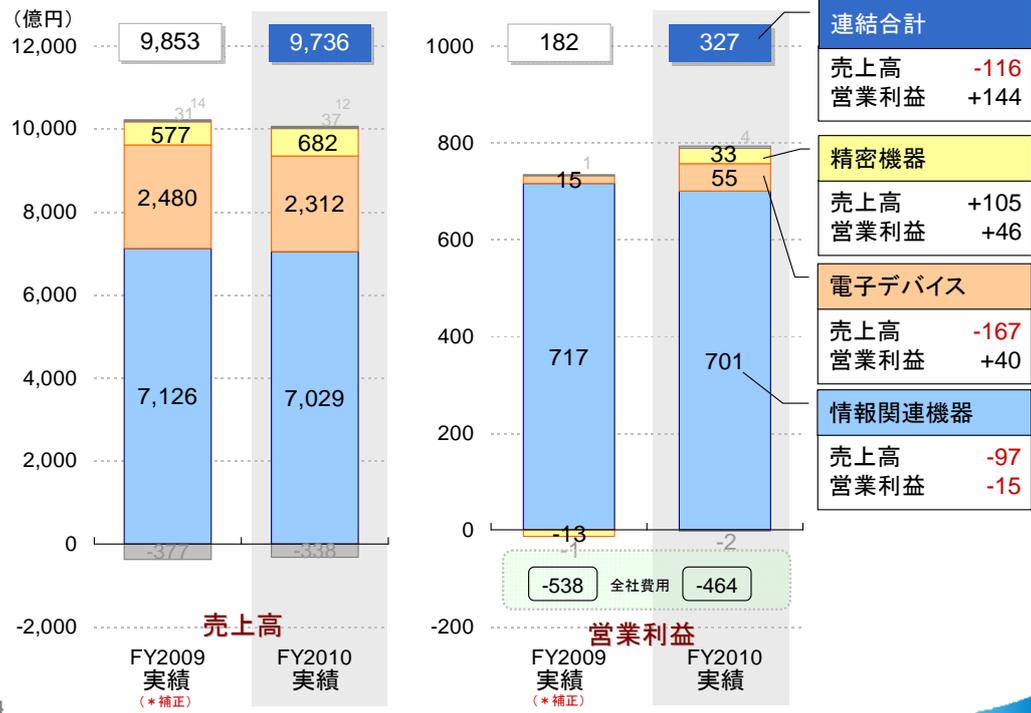
| （億円） | 2009年度 | | 2010年度 | | | | 増減額 / 増減率 | |
|-----------|-------------|-------------|-------------|------|-------------|------|-----------------|---------------|
| | 実績 | % | 1/28予想 | % | 実績 | % | 前期実績比 | 1/28予想比 |
| 売上高 | 9,853 | - | 9,800 | - | 9,736 | - | -116 -1.2% | -63 -0.6% |
| 営業利益 | 182 | 1.8% | 350 | 3.6% | 327 | 3.4% | +144 +79.5% | -22 -6.5% |
| 経常利益 | 138 | 1.4% | 340 | 3.5% | 311 | 3.2% | +172 +124.7% | -28 -8.3% |
| 税引前利益 | △7 | -0.1% | 220 | 2.2% | 153 | 1.6% | +161 - | -66 -30.1% |
| 当期純利益 | △197 | -2.0% | 100 | 1.0% | 102 | 1.1% | +300 - | +2 +2.4% |
| EPS | △99.34 円 | | 50.05 円 | | 51.25 円 | | | |
| 換算 レート | USD | 92.85 円 | 85.00 円 | | 85.72 円 | | | |
| | EUR | 131.15 円 | 112.00 円 | | 113.12 円 | | | |

13

■2010年度の実績

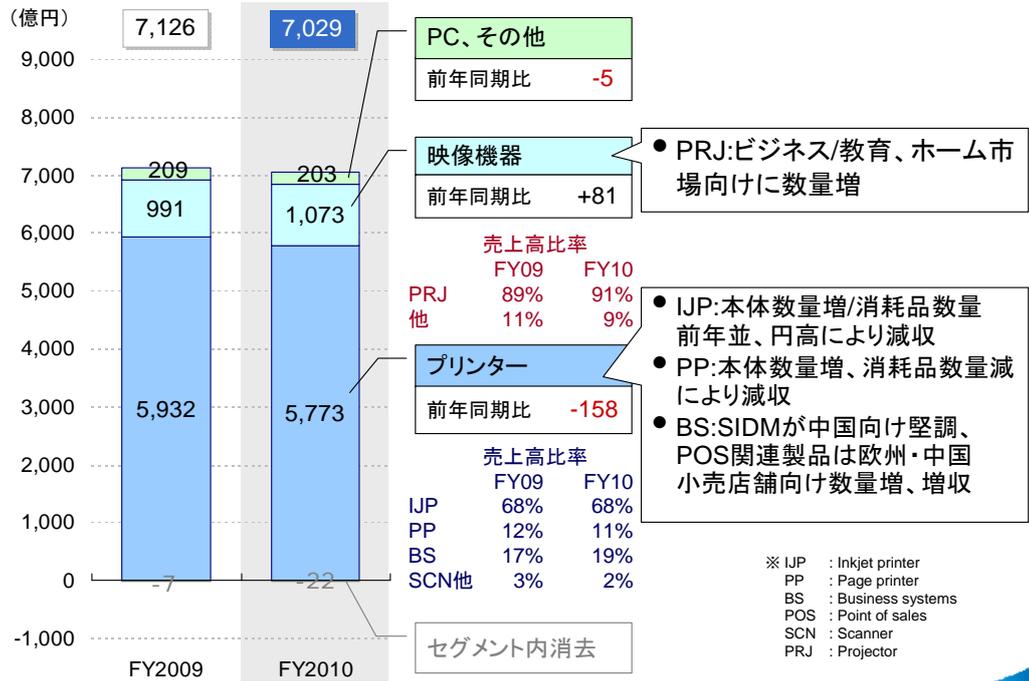
- 特別損失は、事業構造改善費用は想定内に収まったが、東日本大震災の影響を損失計上したことで前回予想に比べ増加。当期利益は、海外子会社との利益配分の適正化と来年度計画に基づく繰り延べ税金資産の積み増しなどで、税金費用が減少したことで、予想どおりの水準。

2010年度業績▶事業セグメント別



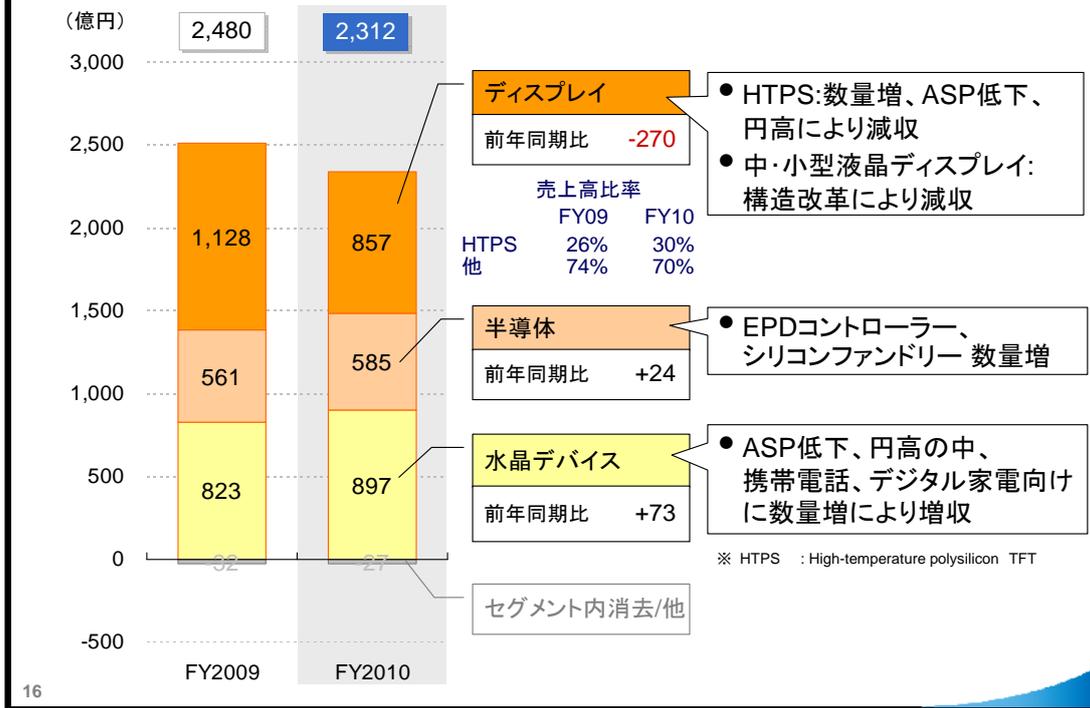
■事業セグメント別業績

売上高比較(通期) ▶ 情報関連機器セグメント



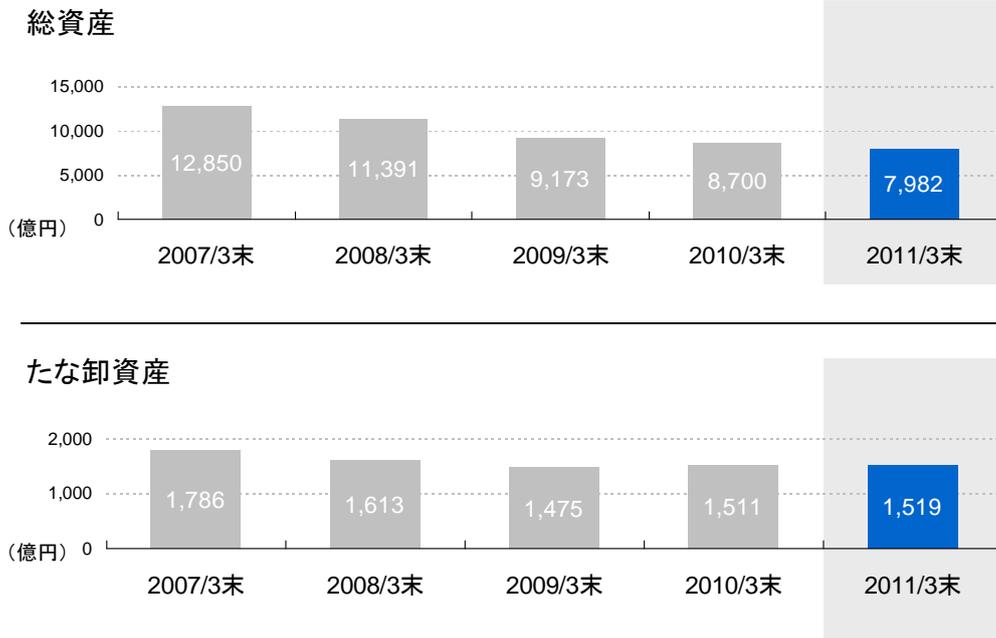
■ 事業セグメント別業績

売上高比較(通期) ▶ 電子デバイスセグメント



■ 事業セグメント別業績

貸借対照表主要項目推移



17

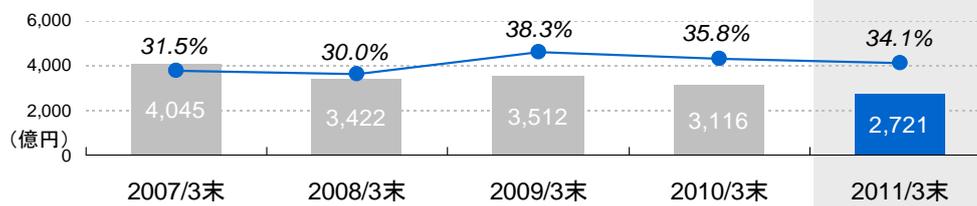
■ 貸借対照表の主要科目

- 総資産は、前期末に比べて借入金返済などによる現金および預金の減少や、設備投資の精査・厳選による有形固定資産の減少などで、718億円減少。

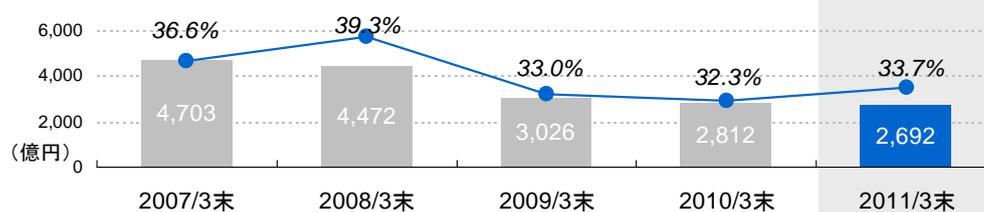
貸借対照表主要項目推移



有利子負債・有利子負債依存度



自己資本・自己資本比率



*有利子負債=2008年度からリース負債を含む
*自己資本=純資産合計-少数株主持分

18

■貸借対照表の主要科目

- 有利子負債は、借入金の返済を進めたことにより、前期末に比べて、395億円減少し、総資産の有利子負債依存度は 34.1% ネット有利子負債は、604億円。
- 円高により為替換算による影響を受け、自己資本は 120億円減少。結果、自己資本比率は 33.7%。

決算ハイライト（第4四半期決算）



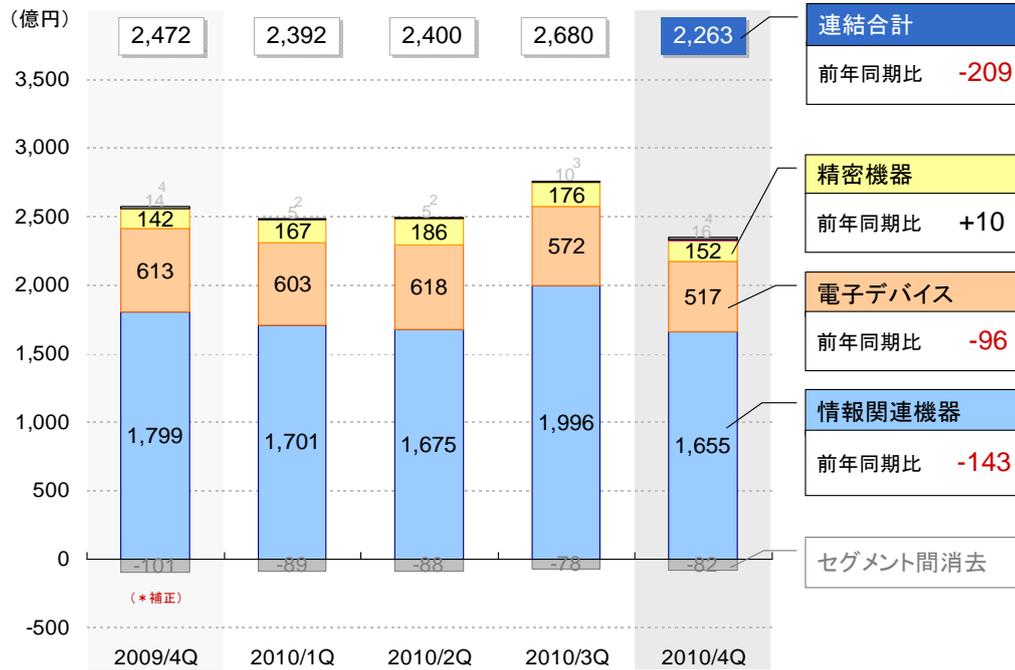
| (億円) | 2009年度 | | 2010年度 | | 増減 | |
|-----------|---------|---------|---------|-------|------|-------|
| | 4Q実績 | % | 4Q実績 | % | 増減額 | 増減率 |
| 売上高 | 2,472 | - | 2,263 | - | -209 | -8.5% |
| 営業利益 | △39 | -1.6% | △11 | -0.5% | +27 | - |
| 経常利益 | △25 | -1.0% | △13 | -0.6% | +12 | - |
| 税引前利益 | △82 | -3.4% | △108 | -4.8% | -25 | - |
| 四半期純利益 | △150 | -6.1% | △67 | -3.0% | +82 | - |
| EPS | △75.33円 | | △33.86円 | | | |
| 換算 レート | USD | 90.70円 | 82.34円 | | | |
| | EUR | 125.62円 | 112.57円 | | | |

19

■2010年度 第4四半期の実績

- 売上高は、前年同期比 8.5%減収の 2,263億円。
- 営業利益が 27億円増益の11億円の損失、
四半期純利益は 82億円増益の 67億円の損失。

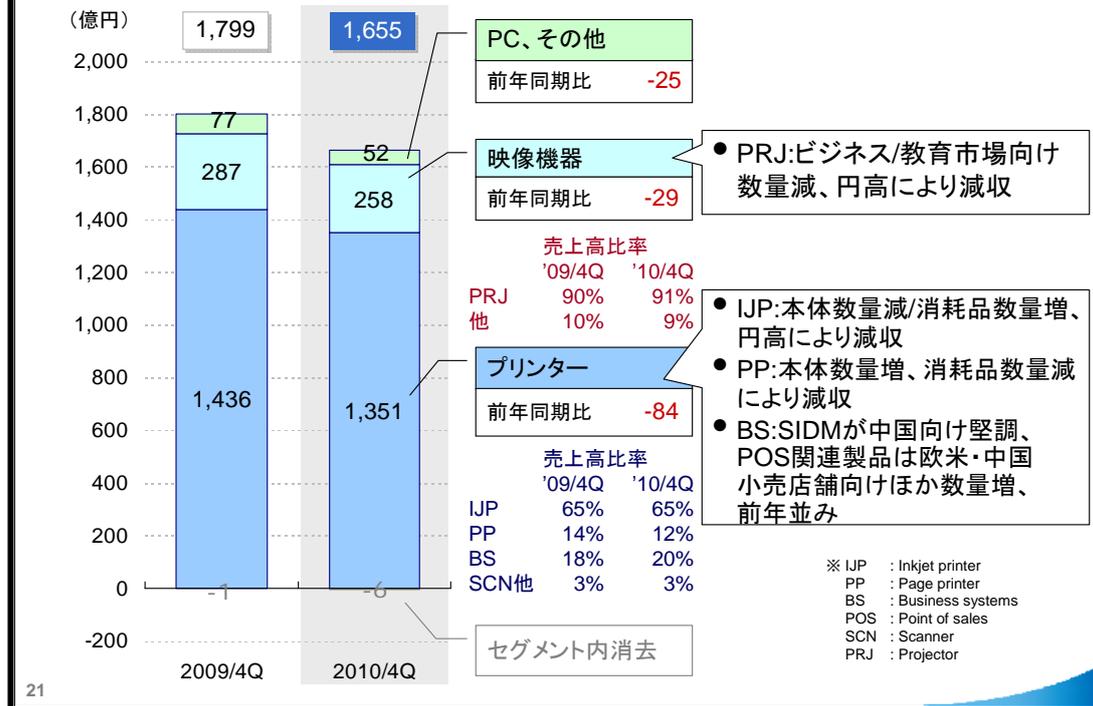
四半期売上高推移 ▶ 事業セグメント別



■ 事業セグメント別の 四半期売上高推移

- 情報関連機器は 前年同期比 143億円の減収、
- 電子デバイスは 96億円の減収、
- 精密機器は 10億円の増収。

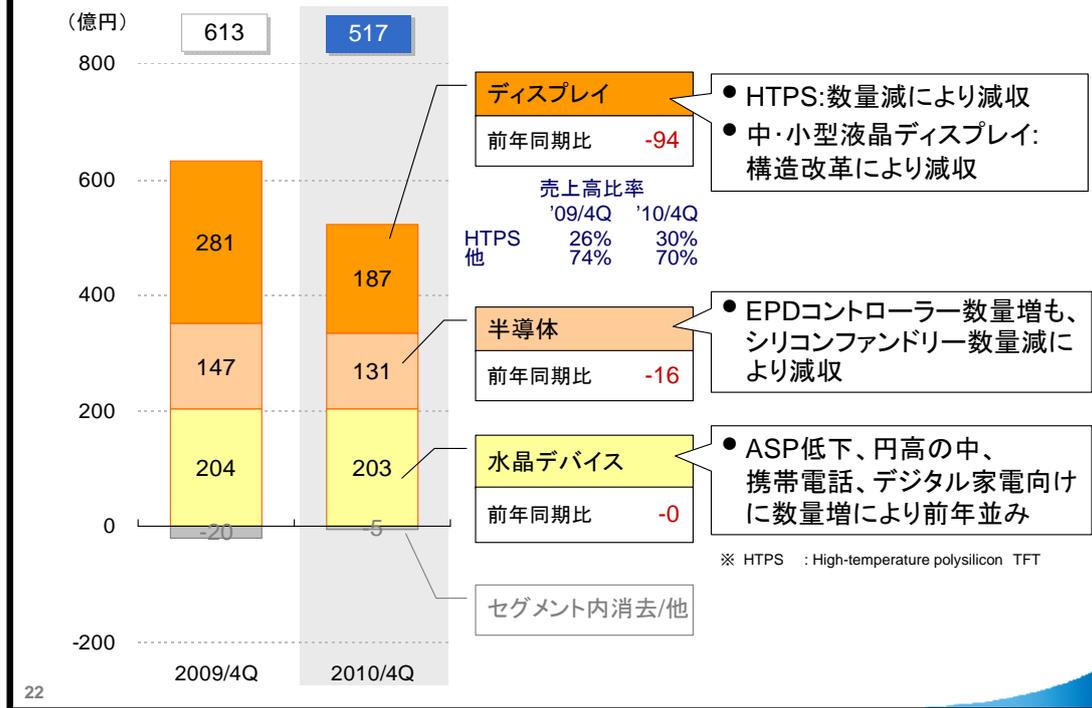
四半期売上高比較 ▶ 情報関連機器セグメント



■ 情報関連機器事業セグメントの 第4四半期 売上高

- 当セグメントでは全ての事業が、円高による影響。
- プリンター事業は、84億円減収。
- インクジェットプリンターは、消耗品の数量は増加、本体数量の減少、ならびに円高影響により、減収。本体の地域別状況については、米国市場が前年割れ、欧州市場が回復する中、当社は米州、欧州で ほぼ前年並みとなったものの、ビジネスモデルの転換を進めているアジア市場と、震災による影響を受けた日本市場において数量減。消耗品については、日本、米州、欧州において、数量を伸ばした。
- ページプリンターは、入札案件などへの 積極的な取り組みにより、欧州、アジアにおいて本体の数量を伸ばしたが、消耗品が日本、欧州において数量減となったことで減収。
- ビジネスシステムは、SIDMが 中国向けの徴税需要を中心に堅調だったことに加え、POS関連製品が、欧米・中国の小売店舗向けや日本向けクーポンプリンターの販売数量が増加したことで、ほぼ前年並み。
- 映像機器は、前年同期比 29億円の減収。アジアのビジネス・教育市場向けに数量を伸ばしたが、欧米において昨年までの水準には届かなかったため、数量減による減収。
- 前回予想との比較
- インクジェットプリンターの売上高は、本体の数量未達により予想を下回った。ビジネスシステムは、POS関連製品が、日本や、米国において計画していたクーポンプリンターの販売時期のずれなどにより未達、中国やアジアを中心に SIDMが堅調だったことにより、予想を上回った。ページプリンターは販売未達となったことにより下回った。
- 映像機器は、ほぼ予想どおり。

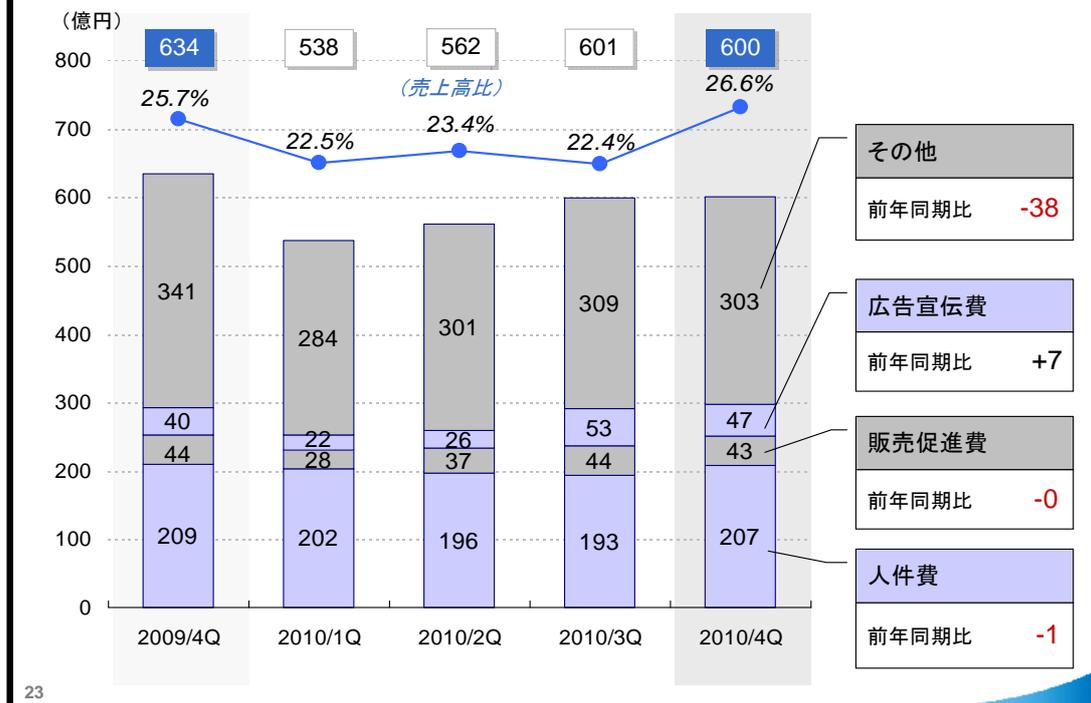
四半期売上高比較 ▶ 電子デバイスセグメント



■ 電子デバイス事業セグメントの、売上高の前年同期比較

- 水晶デバイスは、ASPの低下、ならびに為替の影響を受けたものの、携帯電話、デジタル家電向けに数量が増加した結果、前年並み。
- 半導体は、付加価値の高い電子ペーパー向けコントローラーの数量増の一方、シリコンファンドリーの数量減などで、16億円の減収。
- ディ스플레이事業は、中・小型液晶ディスプレイが減収となったことと、プロジェクター向けの HTPSが、外部顧客向けを中心に数量減で、94億円の減収。
- 電子デバイス事業の売上高を、前回予想と比較すると、半導体事業が シリコンファンドリーやドライバーの数量増により予想を上回ったものの、ディスプレイ ならびに水晶デバイスが、数量未達で予想を下回った。

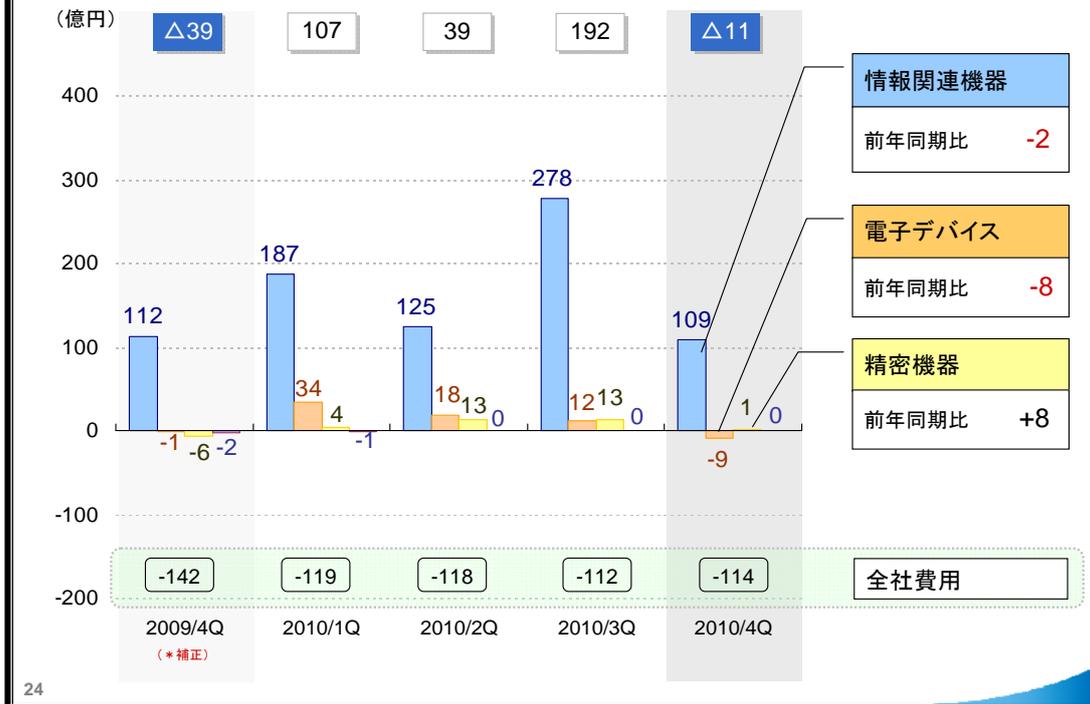
四半期販売費及び一般管理費推移



■販売費及び一般管理費の四半期推移

- 引き続き費用の効率的な執行につとめたことで前年を下回る水準。

四半期営業利益推移 ▶ 事業セグメント別



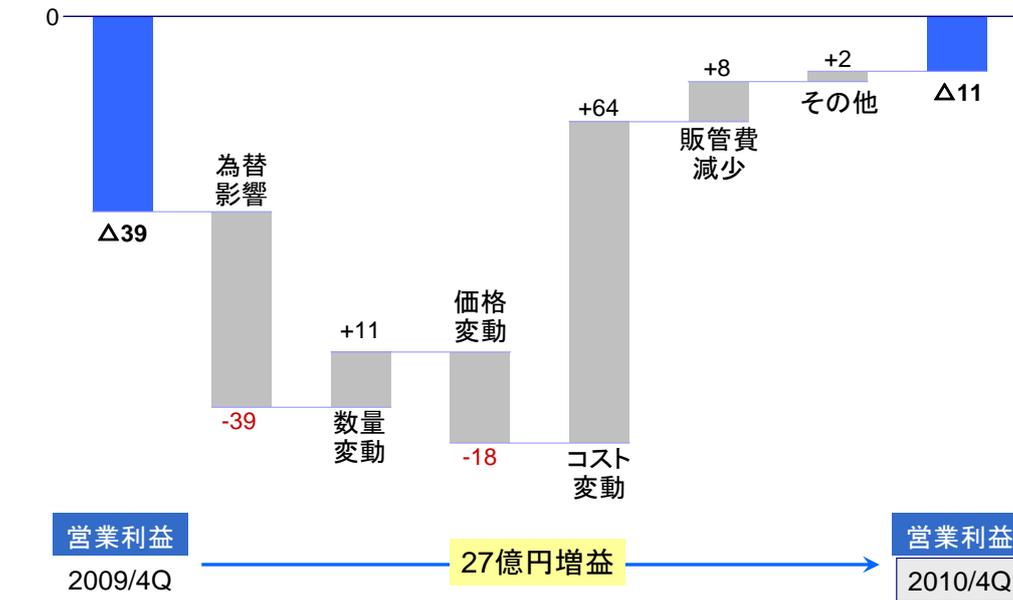
■ 事業セグメント別の 四半期営業利益推移

- 情報関連機器は、前年同期並みの 109億円。インクジェットプリンターは、本体のプラットフォーム共通化によるコストダウンに加え、インクカートリッジの数量増などにより増益。ビジネスシステムは数量増、モデルミックスによるASP低下により減益。プロジェクターは数量減で減益。
- 電子デバイスは、9億円の損失。水晶デバイスは、ASPの低下、計画していたコストダウンの遅れにより減益。半導体は、モデルミックスの改善によるASPの上昇があったものの、ドライバーやファンドリの数量減、為替影響により減益。ディスプレイは、中・小型液晶ディスプレイの生産終了にともない増益。
- 前回予想との比較
- 電子デバイスは上回ったものの、情報関連機器が下回ったことにより、全社としては下回った。
- 情報関連機器は、インクジェットプリンターで ラージフォーマットプリンターの数量が下回ったこと、ビジネスシステムにおいて、今後の旺盛な需要に対応した積極的な販売活動、チャネル開拓などの費用増加などにより、前回予想を下回った。
- 電子デバイスは半導体の売上高が上回ったことに加え、固定費の削減などにより、予想を上回った。

営業利益増減要因分析



(億円)



* 2009年度損益については、旧基準による損益を使用

25

■ 営業利益の前年同期比の要因分解(参考)

- 2009年度 第4四半期の営業損失 39億円 に対し、
為替影響、価格変動の減益要因があったものの、
数量変動、コスト変動により当四半期営業損失は 11億円。

1) 2010年度 決算

2) 2011年度 業績予想

***ご注意**

2011年度業績より、開示セグメントを変更しました。
変更内容につきましては、スライド2をご確認ください。

2011年度 業績予想



| (億円) | 2010年度 | | 2011年度 | | 増減 | |
|-----------|--------|---------|---------|------|------|--------|
| | 通期実績 | % | 通期予想 | % | 増減額 | 増減率 |
| 売上高 | 9,736 | - | 9,700 | - | -36 | -0.4% |
| 営業利益 | 327 | 3.4% | 430 | 4.4% | +102 | +31.5% |
| 経常利益 | 311 | 3.2% | 400 | 4.1% | +88 | +28.3% |
| 税引前利益 | 153 | 1.6% | 300 | 3.1% | +146 | +95.0% |
| 当期純利益 | 102 | 1.1% | 170 | 1.8% | +67 | +66.0% |
| EPS | 51.25円 | | 85.09円 | | | |
| 換算 レート | USD | 85.72円 | 80.00円 | | | |
| | EUR | 113.12円 | 115.00円 | | | |

2011年度の業績予想については、震災に起因する以下の業績変動要因のうち業績予想公表日時点を把握可能な影響を加味している。

- ① 震災により直接被害を受けた生産設備における生産ロスの影響
- ② 原材料・部品等の調達リスクおよびそれに伴う生産変動リスク
- ③ 消費電力量削減に伴う生産設備稼働ロスによるリスク
- ④ 震災の影響に伴う景気変動や最終顧客の需要変動

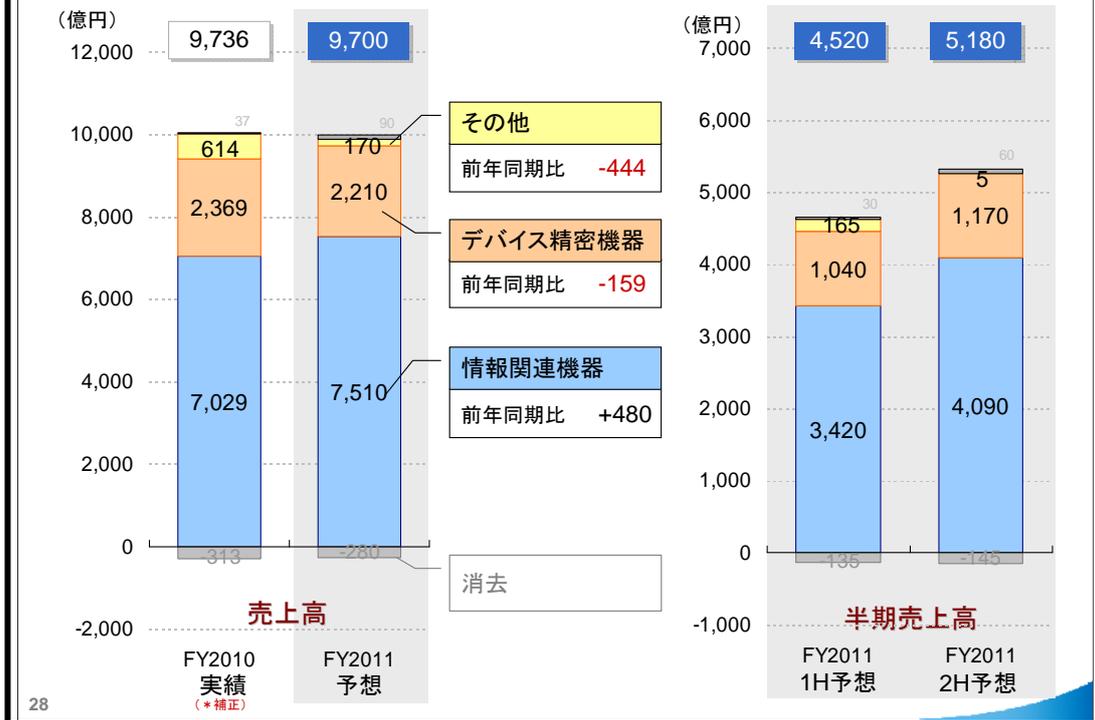
以上の要因のほか、今回の震災に伴う現時点では予測不可能な要因により業績が変動する可能性がある。

なお、これらの変動要因のうち業績悪化のリスクに対してはその影響を最小限に止めるための対応施策を反映し業績予想を策定している。

27

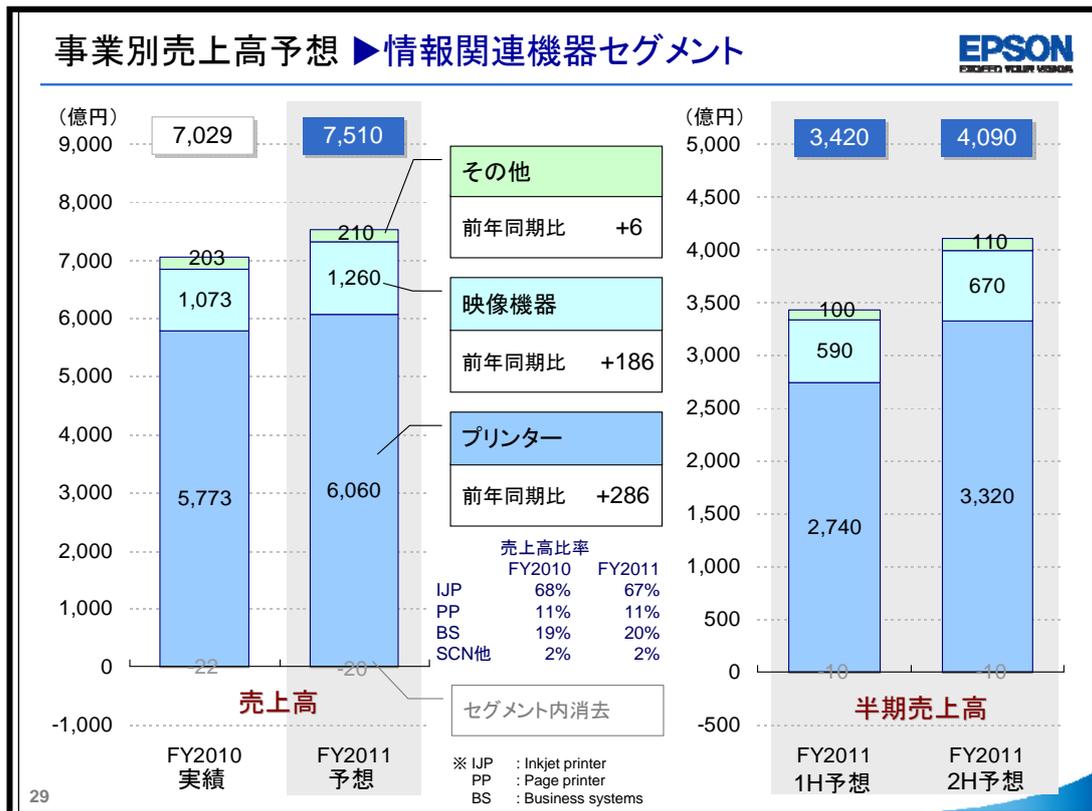
■2011年度の業績予想

2011年度業績予想(売上高)▶事業セグメント別



■事業セグメント別の売上高予想と、上期・下期別の内訳

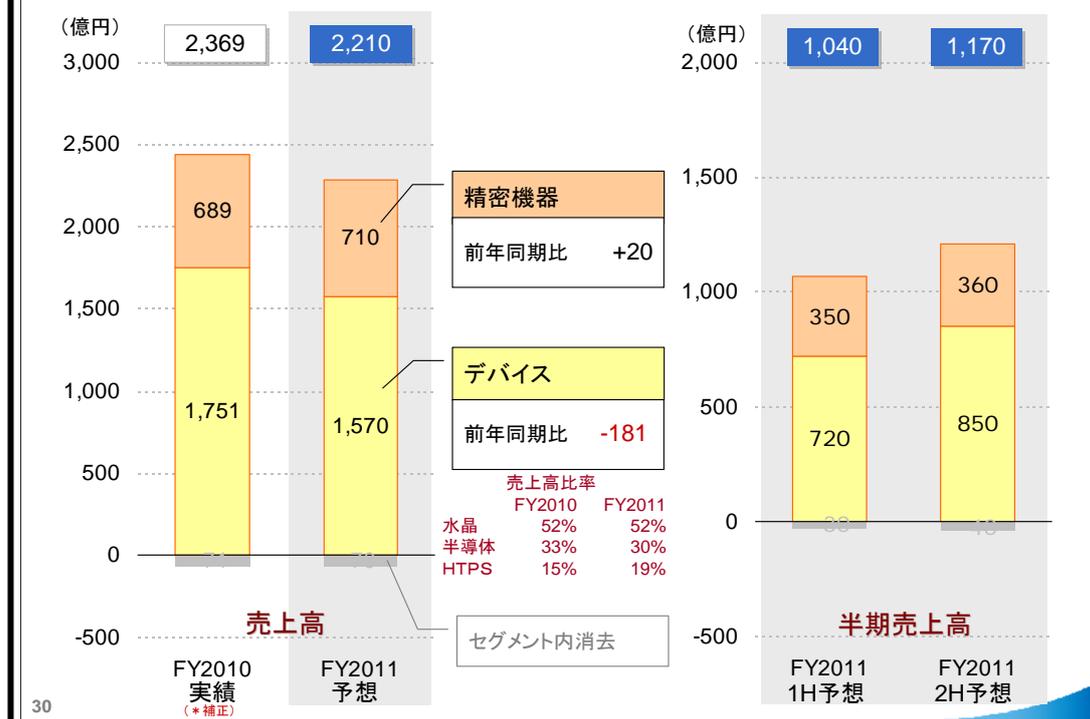
- 情報関連機器は、前期比 480億円の 増収
- デバイス精密機器は、前期比 159億円の 減収を予想。



■ 情報関連機器セグメントの事業部門別売上高の内訳

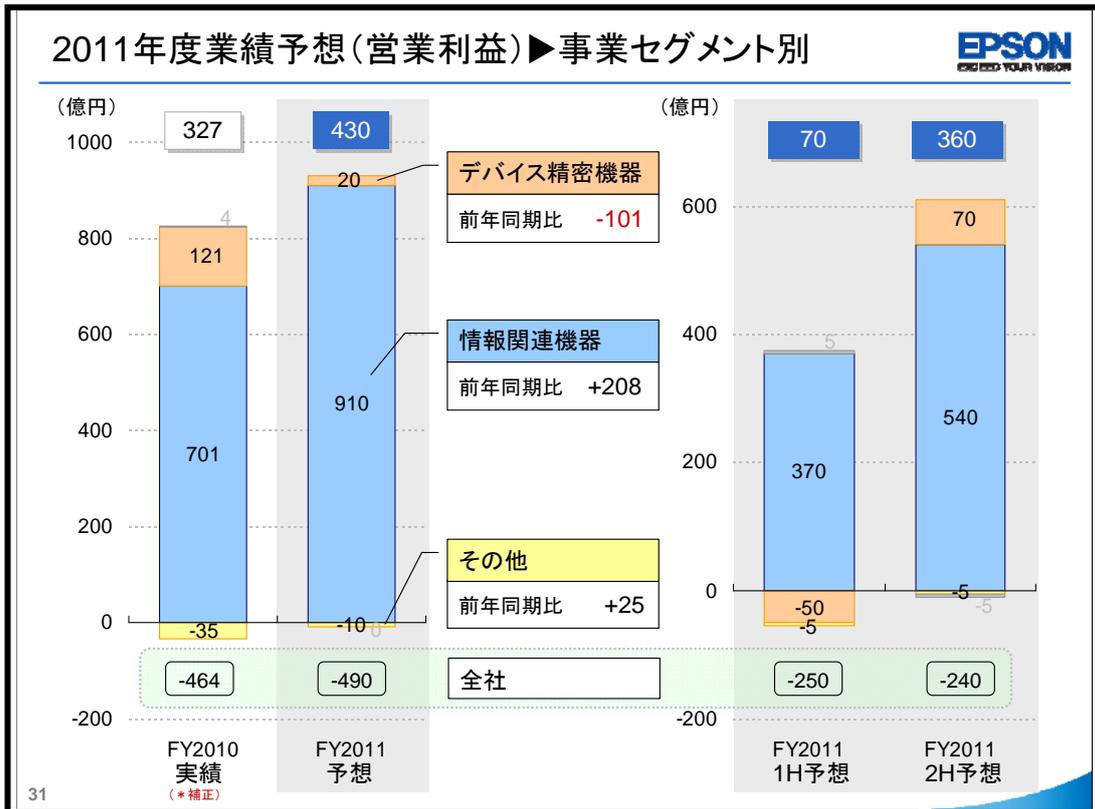
- プリンターは、前期比 286億増収の 6,060億円、映像機器は、前期比 186億円増収の 1,260億円を予想。
- プリンター事業の製品別内訳
- インクジェットプリンターは、震災の影響で生産面における制約があることから、2010年度実績 1,530万台に対して 2%程度の数量増を計画。既存市場に加え、ビジネス、エマージング市場、ならびに商業・産業分野向けに、マーケットの特性にあわせた、最適で競争力のある製品を投入。ページプリンターは引き続き拡販への取り組みを強化、競争力のある製品を投入。ビジネスシステムは、中国をはじめとしたアジア諸国で堅調に推移する徴税需要を確実に取り込むと同時にカラークーポンプリンターなどの新規ビジネスの拡大に取り組む。
- 映像機器事業は、2011年度もプロジェクター市場は10%程度の数量成長が見込む。当社は シェアNo.1 を維持しながら、ビジネス・教育、ホーム向けにそれぞれのお客様のご要望にあった商品を提供していくことで、市場成長を上まわる20%程度の数量成長を目指す。

事業別売上高予想 ▶ デバイス精密機器セグメント



■ デバイス精密機器セグメントの事業部門別売上高の内訳

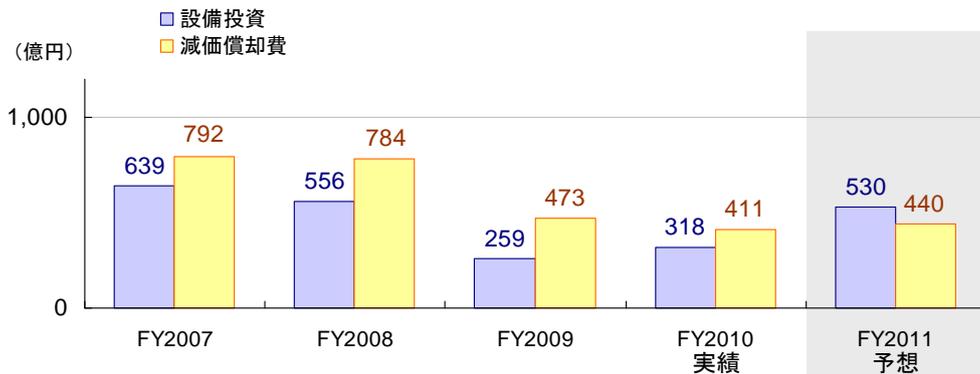
- 部材調達による生産面における制約があることに加え、今後も電力の供給状況や材料の調達状況、および需要の変動については不透明な要素があり、当社への影響を見込む。
- マイクロデバイスのうち、水晶デバイスは、今後も増加が期待される、携帯電話、デジタル機器向けを中心に、需要を取り込む。
半導体は、需要への確実な対応を進めると同時に、中期経営計画の方針にのっとり、社内の完成品・水晶デバイス事業の強化を進めていく。
- HTPSは、社内向けを中心に数量の増加を見込む。



■ 営業利益の事業セグメント別予想と、上期・下期別の内訳

- 情報関連機器は、前期比 208億円の増益を予想。
 インクジェットプリンターは、プラットフォームや部品の共通化によるコストダウンと同時に、費用の効率的な執行による採算改善へ取り組み、さらなる事業の高効率化を進め、前期に比べ 増益を予想。ビジネスシステムは増益、ページプリンターとプロジェクターは、ほぼ前年並みを予想。
- デバイス精密機器は、水晶・半導体領域であるマイクロデバイスにおいて、震災による影響を反映して、減益を予想。

設備投資・減価償却費予想



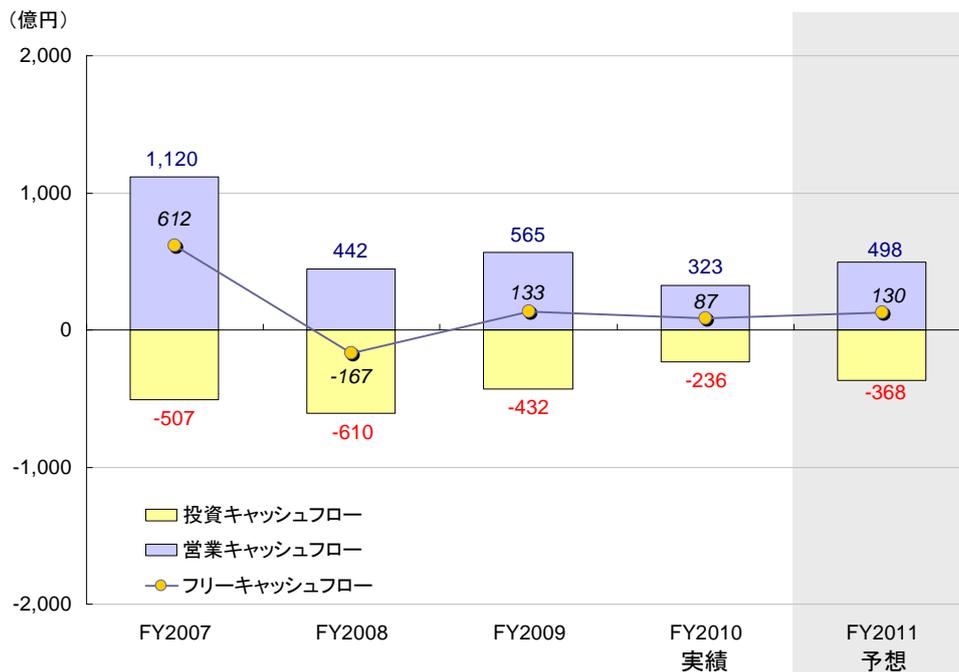
| <セグメント別内訳> | FY2010実績 | | FY2011予想 | |
|------------|----------|-------|----------|-------|
| | 設備投資 | 減価償却費 | 設備投資 | 減価償却費 |
| 情報関連機器 | 178 | 217 | 300 | 240 |
| デバイス精密機器 | 110 | 132 | 140 | 150 |
| その他・調整額 | 29 | 62 | 90 | 50 |

32

■設備投資と減価償却費

- 2011年度は情報関連機器を中心に、設備投資は 530億円を計画。
- 減価償却費は 設備投資が増加することにもない、440億円を予想。

フリーキャッシュフロー予想

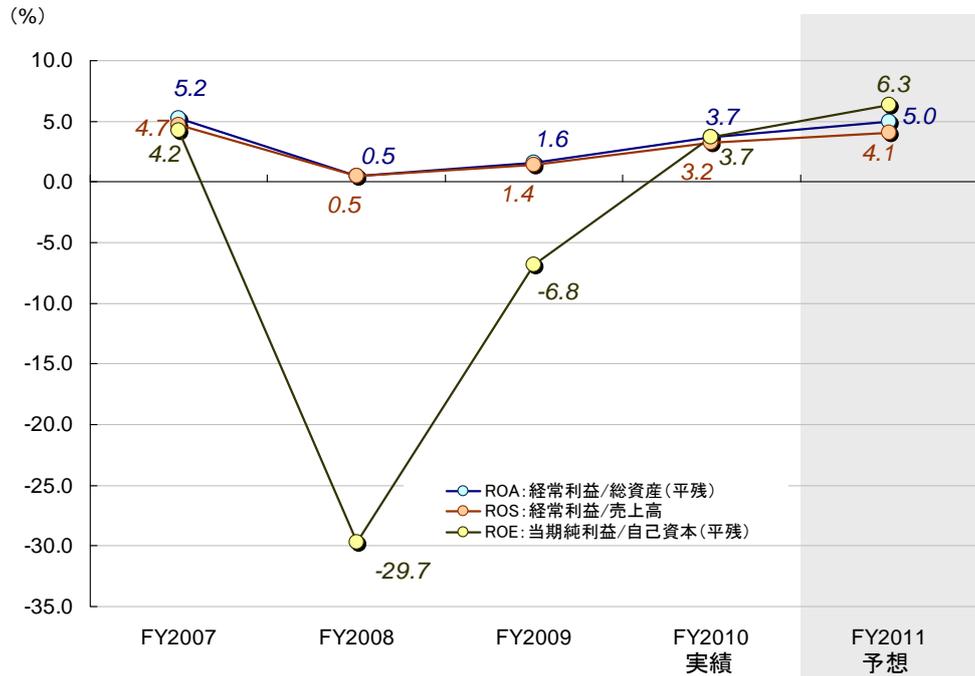


33

■キャッシュフロー

- 2010年度のフリーキャッシュフローは前期比46億円減少の 87 億円。
- 営業キャッシュフローは、税引前利益が改善する一方、たな卸資産の増加などにより、前期比242億円減少の 323億円の収入。
- 投資キャッシュフローは、設備投資の絞込みによる支払いの減少や、固定資産売却などの収入増加により、前期比196億円減少の236億円の支出。
- 2011年度のフリーキャッシュフローは、震災の影響を含め、130億円を見込み。設備投資の増加により投資キャッシュフローが増加、税引前利益の改善と在庫削減により営業キャッシュフローが改善する見込み。

主な経営指標の推移



34

■以上の業績予想に基づく、主な経営指標、

ROSは 4.1 %、

ROAは 5.0 %

ROEは 6.3 %。

EPSON
EXCEED YOUR VISION